発達心理学特講：２０００年秋学期

吉田章宏

ボーヴォワール著「老い：人生の究極的意味」人文書院　下巻
第六章　時間、活動、歴史／４２７－５２７ページ／よりの書き抜き

４２７／「生きてあること［実存すること］、それは人間存在にとっては、己（おのれ）を時間化することである。すなわち、現在において、われわれはわれわらの過去を乗り越える投企によって未来を志向する。そしてこの過去のなかにわれわれのもろもろの活動は落ち込み、惰性態と化したもろもろの要求を背負ったまま、凝固する。」

「人は老人を次のように定義しうるだろう。自分の背後に長い人生をもち、前方にはきわめて限られた存続の希望しかもたない者である、と。」

［ここで、私たちは、時間、空間、他者と自己、身体、言語、映像・・・の相互関連からして、生きられた時間の性格が、それらすべての変化と相関している在り方を、可能な限り豊かに、想像してみなければならない。吉田章宏］

過　去

４２８／「満足感をもって過去を想起するのはとくに年取った人びとである。『彼は希望よりも思い出によって生きる』ことにアリストテレスは留意した。」

「遠い昔の日々へのこの偏愛は大部分の老人に見られることであり、それはしばしば彼らの年齢がもっとも明瞭に看取される兆候でさえあるのだ。」

モーリヤックの言葉「老人はたとえ幼少年期に戻りはしないとしても、彼はひそかにそこに立ち帰る。そして小声で、ママ、と呼ぶ喜びに身を任せる。」

「過去が生きているか否かを決定するのは未来である」（サルトルの言葉）。進歩することを投企（くわだて）としてもつ者は彼の過去から離れ去る。彼は彼のかつての自己を彼がもはやそうではない自己として規定し、それへの関心をなくす。その反対に、ある種の対自存在の投企（くわだて）は、時間の拒否と、過去との緊密な連帯とを必然的にふくむ。大部分の老人の場合がこれであり、彼らは失墜したくないので時間を拒否し、彼らのかつての自己を彼らがそうでありつつける自己として規定する。すなわち、彼らは彼らの青春との一致連帯を主張するのである。内心では昔のままだという確信を持ちつづけている。／　ときには彼らは過去の自分のなかでもっとも誇りうる人物を現在の自分と同一視することを選ぶ。例えば、勇敢な兵士、もてはやされた女性、讃歌すべき母親。

４２９／　「世界がその相貌を彼らにあらわした時期、彼らが後にそうなったところの人間が形を定めた時期、すなわち幼少年期をふり返る。」　自分の歴史（みのうえ）を自分に物語ることをある程度まで可能にしてくれる。　想起されるイメージには、「一種の本質的貧しさ」が存在する。イメージは対象をその一般性において示すのだ。

４３１／　「人は過去を推測するのだ。」（アンリ・ポアンカレの言葉）

しかし、正確なイメージもある。　「私の子供時代の全時期を通じて、［女中の］ルイーズ、私の父、私の祖父の顔は不変なのである。」

４３２／こうした固定映像は変動する世界のなかで永続する。

「年月の経過のなかで、われわれにはつねに現在の時点が自然であるように思われる。」　「事実は、われわれが過去のイメージをふたたび見るとき、それらはすっかり古びて見える。かつてわれわれの人生は新しさであり、新鮮さであったのだが、そのみずみずしさまでも失われてしまったのだ。」

「過去がわれわれを感動させるのはそれが過ぎ去ったものであるからだ。しかしまたそれだからこそそれは実にしばしばわれわれを失望させもする。すなわち、われわれはそれを、未来へ向かって躍進していた現在、未来にみちた現在として生きたのであった。が、いまはその残骸しか残っていないのだ。これが、思い出の土地へ再遊することをじつに空しいものとするゆえんである。」

時間はわれわれを裏切る。空間も、その固有の仕方で、われわれを裏切る。

場所は変化する。たとえ外見上は昔と変わらない場所でも私にとっては昔のままではない。・・・かつての私の計画、欲望、不安などをふたたび見いだしはしないだろう、つまり、私は私をふたたび見いださないのである。

「過去における未来は、もはや未来でなくなったばかりでなく、それはしばしばわれわれの期待を裏切りながら現実化した。」

４３３／４３４　「私は一度ならず、けっして終わらないであろうと思われた友情の始まりを経験した。そのあるものは期待どおりになったが、なかには無関心あるいは敵意に変わったものさえある。あとで仲たがいとなることによって否定された親愛関係をどう解釈したらよいのだろうか？」［フッサールの『経験と判断』河出書房新社で展開されている「否定の意識」「懐疑の意識」などを参照］　過去の出来事の意味というものはつねに疑いをさしはさむ余地がある。

「われわれにとって大切な人の死は、われわれの過去との急激な断絶をもたらす。・・・老人とは、自分の背後に多くの死者をもつ者、なのだ。」　「近親者、友人たちの死」「われわれの人生のなかで彼らとのかかわりのあったすべての部分を奪い去るのである。われわれより年長の人たちの場合、彼らが彼らとともにもち去るのはわれわれ自身の過去なのだ。」　「六〇歳代の人間が、同じ世代の親戚や友人を失うとき、彼は彼自身について故人がもっていたイメージを失うので悲しむ。故人だけがある種の思い出を分けもっていた自分の幼少年時代あるいは青年時代が故人とともに葬り去られるのである。」　「しかし老人たちに取り返しのつかない悲嘆をあたえるのは、彼らが自分の未来をその人間に結びつけていた、彼らより若い人間の死である。とくに彼らがその人間を産み、育て、あるいは形成した場合であり、子供、あるいは孫の死は、このうえもなく大切な事業の突然の崩壊を意味する。それまでその人間のためにしてきたあらゆる努力や犠牲、彼に寄せていた希望などが不条理にも空と化すのだ。」

４３５／　同じ世代の友人の死。「私自身の人生の大きな部分が崩壊したのだった。」　「彼らはこのわれわれの過去を墓にもち去ってしまい、・・・」

「『死者たちの記念碑』、そのなかに葬られているのは私なのだ。」

過去が悦びの対象となることはないだろうか？

「彼は自分がサルトルであることを悦んで欲しかった。私はなんとまちがっていたことか！彼自身にとって彼は「サルトル」ではないのだ。」「人は自分についてのイメージと戯れることはできても、それと同化することはできない、ということを示している。」　４３６／「アラゴンはあらゆる成功が含みもつ挫折について暗示した・・・」　「夢見られた夢と、実現した夢とのあいだには無限の距離がある。」

マルラメ「夢の収穫（とりいれ）が、夢を摘み取った人の心に、たとえ悔や幻滅がなくとも、残す悲哀の芳香」／　サルトル「未来は追いつかれえない、未来は、旧の未来として過去［のなかに］滑り去る・・・」

４３７／「真実は、過去のほうこそわれわれを捉えているということである。われわれは過去がわれわれをそうならしめたもの［現在の自分］をとおして、過去を認識するのだ。自分の現在の状態に不満な人間は過去のなかに、自分の怨念をかりたてるもの、現在をさらにいっそう歎かわしく思わせる理由、を見いだすだけである。」

フローベールの例「過去を現在と比較することによって、彼は自分が失墜した人間であると感じ、一方、この失墜の観念は彼の過去への執着によって強化されたのである。」　過去と現在との対照が耐え難いものとなることもある。［パスカルのパンセ「位を奪われた王でないかぎり、だれがいったい王でないことを不幸だと思うだろう」］

４３８／「老人にとり憑くのは、とくに彼の幼少年期である。フロイト以来－－－そしてモンテーニュはすでにそれを予感していたのだが－－－個人とその宇宙の形成にとって幼年期がいかに重要であるかは人の知るところである。幼年期に受けた印象は強烈で、生涯ぬぐい去ることができない。成人は、それらの印象を想起する閑がほとんどない、なぜなら彼は実生活での均衡をみいだすことに忙しいからだ。しかしこの緊張がゆるむとき、それはらふたたび姿をあらわす。」

ノディエ「老いてゆく人間に自然があたえるもっとも甘美な恵みは、子供のころのいろいろな印象をきわめて容易に想起することがでるということだ。」

４３９／　「子供は人生について骨の折れる修行をする、彼はうち勝たねばならないさまざまなコンプレックスに悩まされる、彼は罪障感、恥ずかしさ、不安を感じる。こうした厭な思い出は壮年期においては抑圧されているが、老年になると甦ってくる。」

「幼少年期、初期青年期の内的葛藤が甦ってくる。」　アンデルセンの顕著な事例。

４４０／「老人性ノイローゼの源泉はすべて幼少年期か初期青年期にあるのである。」　なぜ、老人たちが幼少年期をふり返ることを好むか。「それは幼少年期が彼らを支配しているからだ。彼らが自分の幼少年期のなかに自分を認めるのは、・・・、それが一度として彼らの内部に住むことをやめなかったからである。」「別の理由がある、すなわち、実存は自己を超越することによって自らを基礎づける、ということである。しかるに－－－とくにひじょうな高齢に達すると－－－超越は死に突き当たる。それで老人は自分の生誕あるいはすくなくとも最初の数年間をふたたび自分のものとして身に引き受けることによって自分の実存を確立しようと試みるのだ。」

［幼少年期＝老年期は、社会的次元において認められるだけでなく、当人によって、内的経験として生きられる。］

４４１／　年取った人びとが求めるのは、「自分の幼少年期について詳細で首尾一貫した物語をつくることではなく、ただそのなかにふたたび浸ることなのである。」　主題を反芻し、繰り返しにあきず、そこから新たな気力を得るのである。「彼らは現在から逃れて昔の幸福を夢想する、しかし、昔の不幸は払いのける。」　１）自分の過去を、イメージや幻像や情緒的態度として内化する。２）「過去こそが私の現在の状況を、そしてその未来への可能性を決定するのである。それは、私がそこから出発して自分を未来へ向かって投企する所与、そして私が実存するために超越すべき所与なのである。」　このことは、あらゆる年齢において真実である。「私の肉体のなかに形成された機構を、私が用いる文化的用具を、私の知識と無知を、他人との私の関係、私の仕事、私の義務を過去から受けている。」　「人間はすべて彼の実践によって世界［外界］のなかに彼の客体化を実現し、その［客体化されたものの］なかに自分を疎外する。彼はそこに自分の利害的関心物をつくりだす。」

４４２／「所有者の利害的関心物は彼の所有物であり、しばしば彼は彼の生命そのものより以上の価値をそれに付与する。」　老年には、一つの長い人生がそのときのわれわれの背後に凝固して存在し、われわれをしっかりと捉える。もろもろの「しなければならないと考えること」は増大し、その裏側は数々の不可能事［してはならないと考えて、できないこと］である。　たとえば、所有者は彼の所有物を保守しなければならないので、それらを手放すことはできない、のだ。

老人は、彼の未来を前にして、がんじがらめに縛られている。　未来は、彼にとって二重に有限である。短く、閉ざされている。短いがゆえにいっそう閉ざされており、閉ざされているがゆえにいっそう短く感じられるのである。［いわば、空間と時間の両方の次元において、有限である、ということ。］

未来

４４２／「ある時期以後－－－それが何時であるかは個人によって差があるが－－－・・・彼に残された年月の数は限られている、と」自覚する。この猶予期間は彼には悲劇的に短く思われる。

「時間はわれわれの人生のさまざまな時期において同じようには流れないからだ。時間は人が年を取るにつれて急速に進むのである。」
４４３／「子供にとっては、時間は長く感じられる。彼がそのなかで動き回る時間は彼に課せられている。それは大人たちの時間である。彼はそれを計量する術も、予測する術も知らない。彼は始まりも終わりもない生成のさ中に埋没している。」
「子供のころは世界はじつに新しく、それがわれわれの内部に惹起する印象は実に新鮮で強烈であるので、時間をその内容の豊富さによって評価するならば、それは、習慣がわれわれを貧しくしてしまう年齢期に比べて、はるかに長く感じられる。」
ショウペンハウアーの言葉。「幼少年期のあいだは、・・・一日一日は際限もなく長い。」　注＊＊に、ジョルジュ・コンダミナスの言葉。「旅行中の一日・・・」
４４４／イヨネスコの言葉「そして、来年とは言葉にすぎなかった。この来年なるものが来るだろうと考えたとしても、それはじつに遠い先のことと思われたので、それについて考える必要はなかった。それが現実にやってくるまでは、それは永遠とおなじくらい長く、それゆえけっして来ないのと同じだった。」　「幼少年期を過ぎると、空間はちぢまり、事物は小さくなり、肉体は力強くなり、注意力は確固とし、人は時計や暦の類になじみ、記憶は広さと正確さを獲得する。それでいて四季は依然として、すばらしいあるいはおそるべき緩慢さをもって回転しつづける。・・・私の足下に拡がった未来の広大さが私の心を高揚させた。あと、四〇年、六〇年も生きるのだ。それは永遠であった、なぜなら、ただの一年でさえ私にはあのように長く感じられたのだから。」
若いときから老年期までに時間に対する評価が変化する理由。　１）「いかなる年齢にあろうとも、人は自分の全生涯を自己の背後に、同じ大きさに圧縮された形でもっている、ということ・・・」自然に心に浮かぶ印象。「１カ年がわれわれの年齢の５分の１であるときは、それが５０分の１であるときに比べて１０倍も長く感じられるだろう。」　２）「若い人たちの場合、記憶は過ぎ去った１年を広大な空間にわたって展開された豊饒な細部とともに差し出す。彼らは来るべき年にも同じ［広大な］規模を想定する。これに反して、年を取るとわれわれに強い印象を与えるものはわずかしかない。刻々はわれわれにわずかしか新しいものをもたらさず、われわれは時々刻々に長くかかずらわない。」
４４５／３）「私は１年後は、よくて今日と同じだろうということを知っている。これに反して２０歳のときは、・・・、一年一年はわれわれを陶酔的なあるいは嫌悪すべき、新しい事物の旋風のなかに巻き込んで運び去り、われわれは変貌して出てくる。そして、近い未来にも類似の激動があるだろうと予感する。」　「人は外界への期待、自分自身への期待において存在するのだ。」
「幼少年時代を喚起する情緒的な思い出があのように貴重であるのは、それらの思い出がごく短い瞬間ではあるが、われわれに涯しない未来をもう一度所有させてくれるからなのである。」
子供のころ、「明日」は空虚な言葉にすぎず、私は永遠を所有する。　「子供のころの時間の厚みをふたたび見いだすための最良の方法は旅行することだ、と」イヨネスコの考え。イヨネスコの言葉／４４５ページ。
４４６／「旅行の日々は思い出せば実に長いが、そのときは稲妻のように過ぎるのだ、なぜならわれわれは間断なく緊張していたからだ。」

「老人の視点と小児あるいは青年の視点との根本的な相異は、老人は彼の有限性を発見したが、人生の初期においてはそれに気づかないという点にある。」　この後、よい言葉が続く。（４４６ページ）／４４７／「ところが老人は、彼の人生はすでに出来上がっており、やり直しはできないことを知っている。未来はもはや多くの可能性でふくらんではおらあず、それを生きるべき［彼という］有限の存在に比例して収縮してゆく。」　二重の有限性。第一に、残された時間が有限である。第二に、「人間存在は、たとえ不死であっても、依然として、有限であるだろう。」（サルトル）。「何ものも私を自分自身から脱け出させはしないだろう。」　高齢期になると、この両方がいっしょに、そしてそれぞれ一方が他方によって、開示される。

「彼の余生は短く限られており、そして彼はけっして彼自身から逃れることはできないだろう。」

４４８／「成年期から高齢期にいたるまでに、未来は質的に変化するのだ。六五歳の人は四五歳のときより二〇歳多く年をとっているというだけではない。人は未確定の未来－－－彼はそれを無限なものと見なしがちであった－－－を有限の未来ととりかえたのである。かつてわれわれには地平線にいかなる限界も見えなかった、いまやわれわれは一つの限界を見るのである。」「限られた未来、凝結した過去、これが年取った人びとの直面する状況なのである。」多くの場合、この状況は彼らの活動を無力化する。

４４８／ミシェル・レーリスの言葉「何か仕事に着手しようという欲望さえ失うことがある。・・・。人はまだ自分の自由になるわずかの時間を計量する。それは狭く息苦しい時間であり、一つの仕事をのびのびと発展させるのに必要な期間が欠けているなどと考えることは問題外であった時期の時間とはまるで別のものだ。このことが、何かやろうという熱意を失わせる。」

４４９／　彼はもはやなんら為すべきことが見当たらないか、あるいはそれを完遂するのに必要な時間がないと考えて事業を断念する。

過去に根ざす定言的命令がその力のすべてを保持している場合もある。そのとき、不安にみちた執拗さをもって、年老いた人間は彼に少しの休息も許さない時計に対して戦闘をひらく、「老いが近づいたときに、閑暇をたのしむ気持をまったく失ったことはわたしのもっとも苦しい経験であった」と、ベレンソン７０歳のときの言葉。　さらに苦しいのは、「依然として大切だと考えている目的を達成することができないことである。」

「われわれの投企（くわだて）が、われわれの死の彼方に位置する目標を目指すこともある。」

反復的社会、歴史が緩慢に進行する社会では、人は単に彼個人の未来だけでなく、世界の未来をも自由にしうるのであり、彼はそこに彼の仕事の成果が残ることを予測する。その場合、８０歳の人間も家を建てたり、さらに樹木を植えたりすることに喜びを感じる。」

４５０／　息子が家業を継ぎ、孫がまた継ぐ、と期待することができた社会。

「彼がそのなかに自己を客体化した所有地あるいは企業は無限に存続すると思われた。彼はそのなかに死後も生きづづけ、彼の労苦も無駄ではなかった、と思われたのだ。

今日では、年取った人間はもはやこの種の永遠無窮を当てにすることはできない。歴史の運行が急速化したのだ。人が昨日建てたものを歴史は明日破壊するであろう。老人が植える樹木は伐り倒されるであろう。・・・」

「彼が為し遂げたもの、彼の人生の意味を形造っていたものは、彼自身と同様、滅亡に瀕しているのだ。」

「多くの場合、父は息子のなかに自分を認めることができない。彼は完全に虚無に呑みこまれるのである。」

「今日の社会は、・・・、彼がまだ生きているうちに、老人をすでに時代おくれになった過去のなかに投げ込む。歴史の加速化は、年取った人間と彼の活動との関係を激変させた。かつて人びとは、年月の経過につれて経験という財宝が老人のなかに蓄積されると考えた。・・・。それゆえ、不断の進歩の最終段階である老年は、人間存在の完成の頂点である、ということになる。しかし、実際には、人生はこのように展開するのではない。・・・。／４５１／　人間存在は各瞬間ごとに自己を全体化するが、全体化はけっして完成されえない・・・。『われわれのある部分は硬化し、他の部分は腐る、われわれはけっして成熟しはしない。』・・・。われわれはものを覚え、そして忘れる。われわれは豊饒になり、そして破損するのだ。」

経験という概念。手工業者。知的な領域では、エリオは「教養とは、人がすべてを忘れてしまったときに、残るものである」と言った。残るもの、例えば、「一度学んだものを学びなおす能力、仕事を進める方式、過誤への抵抗力、危険防止の知恵、など。」／　総合的視野。

４５２／　「老いている者しかもてない経験がある、すなわち、老いそれ自身の経験である。」

「個人の生成は社会の生成のなかで行われるが、これと合致してはいない。このずれは、自分が生きている時代に必然的におくれてしまう老人にとって不利にはたらく。・・・
個人は、投企（くわだて）がその新鮮さにおいて際限なく甦るこのリレー競争に従いてゆく力はない。彼は背後にとりのこされる。変化のさ中で、彼は同じままにとどまる。彼は時代おくれになる（失効する）ほかはないのだ。」

「知識の領域においては、彼は必然的におくれをとる。・・・相対的にいって私は一年ごとにより無知になる」

さまざまな活動をその独自性において考察しなければならない。

時代おくれの厄介者と見なされるのは、彼が社会の進化に介入しようと欲するかぎりにおいてである。　消費者としては、違和感もなく、技術的進歩から利益を受ける。

「彼らの活動が問題に付されないかぎり、かれらを人類の全体からへだてるなんらの対立もない。・・・。すばらしい見世物なのである。」

<u>無為に暮らす高齢者の態度と、働いている人々の態度の間には、著しい対照。</u>

４５３／　耕作者の場合。／４５４／　老いた職人、老いた商店主。／４５６／肉体的能力が大きく要求される職業では、・・・。

「彼らの生徒の進歩をとおして、自己超越性を保ちつづける。」

４５７／「肉体のもつ役割が重要であるにもかかわらず、老化現象がもっとも無理なく克服される職業は、ピアニスト、ヴァイオリニスト、チェリスト等、音楽の演奏家である。・・・そして、練習をやめないことが前提条件である。・・・」

知的労働者。／４５７／　科学者。／４６７／哲学者。／４７１／作家たち。／４７８／音楽家たち。／４７９／画家たち。／７８４／科学者と芸術家との違い。／４８６／政治家の老年期

５１９／「死を前にした人間の態度は年齢によって変化する。」